

変わる英国科学

古城天文台

グリニッジ天文台は世界標準時の原点として有名である。東経0度というのも、ここを基準にして測ることになっている。このグリニッジ天文台はロンドンの東約八キロにあった。

「あつた」と書いたのは、戦後同天文台がロンドンの南約八十キロの小村にあるハーストモンソー城という十五世紀の古城に実質上移転したからだ。空襲による被害がひどかったのと、町の灯を避けるためだった。最新科学の本拠地に古城を選ぶなど、歴史あるものを頑固に尊重し続ける英国の姿勢を表している。この城には昔から幽霊がいるといわれている。二度泊まったが、お目にかかれなかった。

ハーストモンソー城はいま、売りに出されている。

科学技術研究会の勧告を受け、グリニッジ天文台をケンブリッジ大学の天文学研究所の隣に再度移転することになったからだ。古城との別れを惜しむ声もあるが、観測専門の同天文台と理論専門のケンブリッジ大が一緒になることのメリットは大きい。

だが、直接の動機はどうやら経費削減らしい。金余りの日本にはスコットランドの古城を買い取って解体し、シベリア鉄道で運ぶことを計画している人がいる。そうしたら、英国の同僚は信じられないという顔つきをした。

(国立天文台助教授)
家 正則

変わる英国科学

地平線

ケンブリッジにいた一九八三年のことだった。中古で買ったテレビで、お気に入りのルボ番組「地平線」を見ていた。その日の題は「これからの英国科学」。

英国は基礎科学に多大な投資をしてきた。巨大加速器、核融合実験炉、大型望遠鏡……。確かにこれらの分野は世界的に成果を上げてきた。だが、金がかかり過ぎる。財政難の英国としては、もっと安く実用になる応用分野に金を使うべきではないか。日本を見習おう。あの国は基礎科学に見向きもしないで、応用に投資してきた。おかげで経済躍進を遂げたではないか。

英国でも将来の雇用を増やす分野を重視するべきだ。「科学技術研究会」の予算の分け方は間違っている。いか、というルボだった。「科学技術研究会」はその少し前まで「科学研究会議」という名だった。「技術」をつけたのも経済重視の現れと見える。当時、すでに基礎科学分野での予算が削られつつあり、天文学でも規模縮小が心配されていた。そこへ、このキャンペーン。英国の基礎科学はどうなることかと案じつつ見ていたことを思い出す。

今年、日本の大型望遠鏡計画の現状説明と日英協力の相談に行った。日英協力に対する英国側の期待は非常に大きいと感じた。英国が日本流でいうところ、日本が英国流で世界の知性となるチャンスだ。

(国立天文台助教授)
家 正則

変わる英国科学

国際協力

英国の天文学者は世界中を駆け巡っている。それとていうのも、海外に行くつも天文台を国際協力で作作り、使っているからだ。

王立グリニッジ天文台は、ラ・パルマ天文台(大西洋カナリヤ諸島)と英豪天文台(オーストラリア)にトップクラスの望遠鏡を作った。王立エジンバラ天文台はオーストラリアに広角シュミット望遠鏡を置き、ハワイには赤外線望遠鏡と新型の電波望遠鏡を建設した。

ジェット機の時代とはいっても、英国からハワイやオーストラリアへ飛ぶのは決して楽ではない。それでも良い観測地を求めて海外へ進出して行くのは、世界をまたにかけ、活躍してきて活躍してきいた英国魂そのものといえよう。もっとも、天気の悪い英国内では勝負にならないといいうのも大きな要因ではある。

私たちは現在ハワイに口径七・五メートルの望遠鏡を作る計画を練っている。必要なら新しい技術の開発にもめどが立ち、国際的にも各方面からその実現が期待されている。だが、日本ではまだ国有財産となる施設を海外に置いた前例がない。基礎科学に対するわが国の方針も変わりつつあるが、予算の枠は厳しい。軍事的進出や過度の経済進出は歓迎されないが、国際化が叫ばれる時代、科学文化の面では日本の出番が来ている。

(国立天文台助教授)
家 正則

変わる英国科学

若手起用

氣にいらっているジョークをひとつ。「英国では禁止されていない限りなんでも許される。ドイツでは許されていない限りすべて禁止だ。イタリアでは禁止されていないすべて許される」(イタリアびいきの方、ごめんない)。英国と西独に一年ずつ留学しただけで、しかも狭い社会しか知らない。それでもいろんな面で違いを感じた。

二十世紀前半のドイツでは、天文学にも深い影響を与えた相対論や量子力学が花を咲かせた。ところが戦後、ドイツの天文学は英国にかなり水をあけられてしまった感じがする。きちんとして、独断的につけを書て。

英国では博士の学位を早い人は二十五歳でとれる。ドイツでは日本より二十歳と若い。ドイツでは二十歳でとれる。ドイツでは二十歳でとれる。ドイツでは二十歳でとれる。

十代前半で教授職や所長職につく人がいる。優秀な人については、若くてエネルギーが豊富にうちに十分活躍できるポストを与える。ドイツや日本ではそんな冒険はしない。この柔軟さの違いは大きいのではないだろうか。

日本天文学会推薦で五十一歳にして日本学術会議会員になられた杉本大一郎さんは最年少会員だそう。天文学のコミュニティーは日本の学者社会の中では最も健全な方なのかもしれない。

(国立天文台助教授)
家 正則